

コアとなる事業の概要3つ（事業のタネ）

活動地域・団体名：北信スマートテロワール

今後地域の将来像を実現するために必要と考えられる事業を3つ書いてください。

1	事業名称：土（持続するインフラ）づくり～住宅や地域交通を対象としたエネルギーの地産地消の実証事業		
事業概要	事業の内容	現時点で想定される課題・ボトルネック	
<p><b>a. 地域木材を使ったウェルネス住宅の体験：既存住宅の環境負荷の低減の実証：</b>築30年以上の既存住宅に断熱リフォーム（エコリノバ）を施し、外装に地域木材を使った改修版のウェルネス住宅モデルをつくる。健康に加え住宅の長寿命化も促す。石油エネルギー削減と森林の地域経済循環の向上、CO2の削減、管理の行き届かない森林面積の減少を目指す。</p> <p><b>b. 小布施版ソーラーシェアリング（ぶどう、トマト）での実証地域の電気をつくる農業モデル：</b>地域内必要電力量から必要面積を算出し、電力の生産規模を戦略的に設定。農業振興地域以外の農地でのソーラーシェアリング（アグリソーラー）、施設園芸（トマトなどの野菜やシャインマスカット等のブドウ）を中心として次世代の農業を模索する。つくった電気を地域内で消費（住戸、交通、通信）するモデルを構築し、地域インフラとして地域内で消費できるエネルギービジョンを示す。石油エネルギー削減とエネルギーの地域経済循環の向上、CO2の削減を目指す。</p> <p><b>C. エネルギーの地産地消：地域の電気を地域交通で使う仕組みの検討（移動こそ観光に）：</b>石油エネルギー削減とエネルギーの地域経済循環の向上、CO2の削減を目指す。また圃場（果樹・牧場）周辺の剪定枝の熱利用も検討する。特に循環型の電力消費の手段のひとつとして、電気カー、電気バスの地域交通の実験を行い、コース把握を行う。また、剪定枝の熱利用の可能性（複数の住宅、地域暖房）を検討する（事業1にも関連）。</p>	<p>①なぜこの事業をやるのか（Why）</p> <p>a.既存住宅の環境負荷の低減、CO2の削減、地域木材の利用、住宅・健康寿命の延伸、地域認証、健康価値（Health Capital）の増大（投資） b.CO2の削減、遊休農地の活用、地域に必要な電力を生産し、地域で消費する、地域交通課題の解決、付加価値型の農業 c.地域交通課題の解決、エネルギーの地産地消</p>	<p>・住宅の環境性能評価に対する知見 ・農地利用に関する開発手続き ・開発費用と運営費のバランス ・開発規模の把握</p>	
	<p>②どの地域資源を活用するか</p> <p>a.地域の木材、地域の工務店 b.農地、太陽光 c.小水力発電所の電気、太陽光発電による電気</p>		
	<p>③商品・サービスの具体的な内容は何か（What）</p> <p>a.高気密、高断熱の地域型工コ住宅 b.アグリ・ソーラーシェアリングによる地域発電所 c.地域の再エネを利用した地域のためのスロー・スモールモビリティ</p>		
	<p>④誰がこの事業の主たる担い手か（Who）</p> <p>a.小布施まちイノベーションHUB、信州大学、フォレスト工房もくり、勝山建設 b.おぶせファーマーズ、おぶせ電力、HOUSE HOKUSAI、スマートテロワール協会 c.小布施まちイノベーションHUB、スマートテロワール、おぶせ電力、HOUSE HOKUSAI、小布施牧場</p>		<p>課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像</p>
	<p>⑤この事業により地域内で何が循環するか またはどのような循環が起こるか</p> <p>a.地域の木材、地域の工務店の人材や技術、既存住宅 b.遊休農地、自然エネルギー c.小水力発電所の電気、太陽光発電による電気、バイオマス資源</p>		<p>・交通関係の導入にあたって協力してくれる電気カー、電気バスのノウハウを持った企業 ・工コ住宅の知見を持った建築家</p>

2	事業名称 循環するものづくり～食と農の再構築と加工拠点の連携事業		
事業概要	事業の内容	現時点で想定される課題・ボトルネック	
<p><b>a. 耕作放棄地をつかった酒米づくり</b> 小布施町にある1.8haの遊休農地の内、今後増えていく可能性がある町の北部に広がる水田を置換し、加工向けの農産物を生産する。まず第一歩として酒米づくりに挑戦し、有力な加工業者（酒造）と連携し、生産から販路（販売）まで一体的に考える。</p> <p><b>b. 有休農地を、牧場に、たい肥を活用する土づくり～和ウニ農場での実験</b> 2016年から耕畜連携を推進している山形大学農学部鶴岡との連携を通して小布施牧場の休耕田への拡張により増加する堆肥を用いて輪作可能な畑作の推進、トモロコシ、小麦等飼料の自家生産をおこなう、又、多様な果実栽培の地味(テロワール)づくりを進める。果実廃棄物に關しても土づくりや燃料としての利用を試験する。果実戦力品種の開発にも応用し、ワイン工場での応用も図る。</p> <p><b>c. ささまざまな「土」の検証によるエディブルガーデン（食べられる庭）づくり</b> 現在使われている肥料や農薬、除草剤などの残留度を調べ、自分達の土づくりにとって必要なことを知る機会をつくる。エディブルガーデン（食べられる庭）づくり、畑を身近なものとして関わり知る仕組みをつくる。</p> <p><b>d. 地域に根差した加工品を組み合わせた料理開発</b> Amber LAB、伊那食品、サンクゼールなどの連携信州の加工食材をさらに掛け合わせるレストランのチャレンジ。多様な消費を生み出すことにより、消費のパターンを無限に生み出すレシピの検討と、モデルケースとなるような軽トラックを改装した「Deli Cafe」トトラック制作する。単なるマルシェではなく、長野県の食を楽しむという表面の目的のほかに、生産者や食を通して色々な業種の方々が出会い、生産性を自主的に作り、回し、地域へ還元していくことを目的とする。そのために、食で創る未来プロジェクトに關わって頂く食品メーカーにも1社1社お願いに伺う。</p>	<p>①なぜこの事業をやるのか（Why）</p> <p>a.遊休農地の解消、出口を意識した加工品の開発、美食革命、地産地産 b.たい肥の資源循環、牛乳による地域経済循環、特徴的な加工品づくり、耕畜連携・畑作輪作、地域内加工消費農村、エコチェーン（廃棄物の資源化） c.比較実験による安心・安全な土づくり、農業に対する環境教育、FootPrintの減少 d.食の3次展開、信州食材の新たな加工法の開発、美食革命、地産地産、未利用資源の経済自立</p>	<p>・開発費用と運営費のバランス ・開発規模の把握</p>	
	<p>②どの地域資源を活用するか</p> <p>a.遊休農地、酒造場 b.休耕田、ワイナリー、牧場のたい肥、山形の先進事例、果樹廃棄物 c.地域の土、地域の土にとって有効なたい肥等 d.地域に根差した加工事業者、長野市内の空き家</p>		
	<p>③商品・サービスの具体的な内容は何か（What）</p> <p>a.日本酒 b.ワイン、たい肥 c.土に対する実験結果、身近な野菜畑 d.加工品を使った新レシピ、食の交流拠点</p>		
	<p>④誰がこの事業の主たる担い手か（Who）</p> <p>a.小布施まちイノベーションHUB、松葉屋本店、おぶせファーマーズ b.精ワイナリー、小布施牧場、スマートテロワール協会 c.トボス、須坂市農業試験場 d.AmberLab、伊那食品工業、サンクゼール、スマートテロワール協会、6次産業センター、小布施まちイノベーションHUB</p>		<p>課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像</p>
	<p>⑤この事業により地域内で何が循環するか またはどのような循環が起こるか</p> <p>a.遊休農地、酒造場 b.たい肥 c.地域の土、土に対する知識 d.信州産の加工品、長野市内の空き家</p>		<p>・土の成分分析や助言が可能な専門家</p>

3	事業名称：人づくり～災害復興からの地域のレジリエンス強化と農村景観をつくる「公」担い手となる中核人材育成事業		
事業概要	事業の内容	現時点で想定される課題・ボトルネック	
<p><b>a. 平時に楽しみ有事に備える農業×防災テーマパークnouvo：</b>「nouvo」とは「農業」+「防災」=「農防」。イタリア語で「新しい」を意味するこの語に「21世紀型の新アミューズメント」との思いも込めました。平時を楽しみ有事に備える、日本初の施設を構想する。日本笑顔プロジェクトで災害後、支援活動を行う中で本当に現場で役立つものをピックアップ。それらをnouvoに集約し、体験・習得できる施設として運営していく。小布施の基幹産業である「農業」をベースとし、安心・安全な食のあり方を考え実践する場、非常時の食糧補給の場としても活用していく。表向きは、幅広い年代に興味をもていただくためアミューズメント化するが、その根底には防災力の向上や食育など「ライフ」というテーマを含み、nouvoの目的である「楽しむ」の延長に「防災力を高める」「すやかに生きる知恵を身につける」ことを目指す。このパークの運営をするコアメンバーの構築と、現在の復興の核となる重機オペレーター（今年度100人→150人）を育成する。</p> <p><b>b. 森林の消費者育成～木遣いのできる人材育成</b> 長野県の山林では、管理が行われていない森林が増え松枯れや間伐材の管理が深刻な問題となっている。この課題の解決のために「関わる人材の育成」、「関わりつくる産業の構築」が重要である。主に工学部建築学科の学生を対象に、森の維持管理や森の木を伐りだすプロセスを学び「木づかい」ができる人材育成プログラムを開発する。また生成された材を既存住宅に利用し、省エネルギーで暖かい地域材による住宅の環境性能評価と経済効果の計測・試算を行う（1.の事業とも関係）。</p>	<p>①なぜこの事業をやるのか（Why）</p> <p>a.災害に強い町を創る、インロビゼーション、コミュニティアントレプレナー、新しいCivi lHeartの創造、災害に対するレジリエンス、全員参加の共同体 b.景観をつくる「公」の開発、コミュニティアントレプレナー、新しいCivi lHeartの創造、地産地産、未利用資源の経済自立</p>	<p>・運営費 ・組織化と体制のゴール設定</p>	
	<p>②どの地域資源を活用するか</p> <p>a.今まで交わらなかった人材、農的現場、アクティビティ b.地域木材、木こりの知見、地域の森林資源、地域の製材工場</p>		
	<p>③商品・サービスの具体的な内容は何か（What）</p> <p>a.農業と防災をからめたアミューズメント・アクティビティと防災に対応できる人材を育成する b.木を使える人材を育成（目標10人）、若い世代と木材生産現場の関係構築</p>		
	<p>④誰がこの事業の主たる担い手か（Who）</p> <p>a.日本笑顔プロジェクト、小布施まちイノベーションHUB b.小布施まちイノベーションHUB、Amber lab、信州大学 フォレスト工房もくり</p>		<p>課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像</p>
	<p>⑤この事業により地域内で何が循環するか またはどのような循環が起こるか</p> <p>a.災害時に備えた平時のスキル形成、災害時の行動力を備えた人材 b.身近な地域資源を扱える人材、学ぶ場として活用可能な地域フィールド</p>		